中学生の現実世界とSNSの世界における親しい友だちのつきあい方とイメージに関する研究

五浦　哲也
北海道情報大学

Do Junior High School Students Envision Close Friends and Communicate with Them Differently in the Real World and on Social Media Platforms

Tetsuya ITSUURA
Hokkaido Information University

2020年12月

北海道情報大学紀要　第32巻　第１号別刷

〈論文〉

中学生の現実世界と SNS の世界における親しい友だちのつきあい方とイメージに関する研究

五浦　哲也*

Do Junior High School Students Envision Close Friends and Communicate with Them Differently in the Real World and on Social Media Platforms

Tetsuya　ITSUURA *

要旨

本研究は，中学生が現実世界と SNS の世界における親しい友だちとのつきあい方とイメージを象徴する形容詞の相違について明らかにした。北海道の 2 中学校 247 名に質問紙調査を行い，155 名から有効回答を得た（62.8%）。因子分析により SNS の利用の有無による現実世界の親しい友だちのつきあい方と SNS を利用している生徒における現実世界と SNS の世界における親しい友だちのつきあい方の相違が明らかになった。また，親しい友だちのイメージを象徴する形容詞の調査結果を出現率や双対尺度法により分析したところ同様の傾向が認められた。

Abstract

This study examined the ways in which junior high school students viewed and communicated with close friends in the real world and in social media environments. A questionnaire survey was administered to 247 students of two junior high schools in Hokkaido and 155 valid responses were received (response rate 62.8%). A factor analysis revealed distinctions in interactions between close friends in the real world who do not use social media channels and in the communicate ways of students who use social media in the real world and social media environment. Analyses accomplished through the dual scaling method and the evaluation of appearance rates evidenced similart endencies in the use of adjectives to symbolize close friends.

キーワード

現実世界（real world）　SNS の世界（social media environments）
中学生（junior high school students）　親しい友だち（close friends）

* 北海道情報大学経営情報学部教授　Professor, Department of Business and Information Systems, HIU

1. 研究目的

1-1　問　題

社会は，インターネットやスマートフォンの普及などの情報化，グローバル化により，世界中の最新の情報をリアルタイムでの収集が可能となった。我々は，日々，指数関数的に増大する情報から必要とする情報への選択的接触を行っている。

また，インターネットやスマートフォンは，世界中の人と繋がっていくコミュニケーションの一形態としての機能も果たしている。

このような情報化社会では，世界中の文化，宗教，伝統，習慣などの多様な価値観や考え方に触れる機会も多くなる。ボーダーレスな情報化社会は，ダイバーシティ社会に関連することを踏まえ，個々の価値観や考え方等の違いを認め，尊重していく資質・能力は必須な力と言える。

しかし，総務省令和元年度版情報通信白書(2019)では，「エコチェンバー」[1]や「フィルターバブル」[2]といった「人間の傾向とネットメディアの特性の相互作用」として同じ価値観や思考を持つ者同士を繋げやすいことが「サイバーカスケード」[3]に発展する可能性を危惧している。

情報化社会への対応は，世代間により様相が異なる。総務省令和元年度版情報通信白書（2019）によるとテレビ視聴時間は，2000 年～2015 年の間で 50 代，60 代は大きな変化は認められないが，13 歳～19 歳，20 代，30 代，40 代は減少しており，特に 13 歳～19 歳，20 代の減少は大きい(p.98)。また，インターネット利用時間は，各年代とも増加しているが，13 歳～19 歳，20 代，30 代の増加は大きい。さらに，13 歳～19 歳のインターネット利用目的における約 8 割が「ソーシャルネットワーキングサービスの利用」「無料通話アプリやボイスチャットの利用」「動画投稿・共有サイト」であることが明らかになった(p.256)。ソーシャルネットワーキングサービスの利用状況においては，13 歳～19 歳の 75.0%が利用しており 1 年前の 68.4%を大きく上回っている実態も明らかにしている(p.257)。

このように子どもたち[4]は，コミュニケーションを目的としてのインターネットが浸透している。現代の子どもたちは，家庭，学校，地域といった限定された現実世界とインターネットやスマートフォンといったボーダーレスな世界に身を置き，コミュニケーションをとっている。

教育現場においては，いじめ，不登校等は，いじめ防止対策推進法やいじめ防止基本方針，児童生徒理解・支援シート等様々な施策や取組が行われているにも関わらず，解決すべき喫緊な課題として今なお掲げられ続けている。

しかも，いじめ，不登校等の様相は，少子高齢化，情報化，規範意識の低下など子どもを取り巻く環境の変化に呼応し，多様化・複雑化してきていることが解決を困難にしている。

---

1) 総務省(2019)では，「ソーシャルメディアを利用する際，自分と似た興味関心をもつユーザーをフォローする結果，意見を SNS で発信すると自分と似た意見が返ってくるという状況を，閉じた小部屋で音が反響する物理現象にたとえたもの」と説明している(p.102)。

2) 総務省(2019)では，「アルゴリズムがネット利用者個人の検索履歴やクリック履歴を分析し学習すること で，個々のユーザーにとっては望むと望まざるとにかかわらず見たい情報が優先的に表示され，利用者の観点に合わない情報からは隔離され，自身の考え方や価値観の「バブル（泡）」の中に孤立するという情報環境」と説明している(p.103)。

3) 総務省(2019)では「人々がインターネット上のある一つの意見に流されていき，それが最終的には大きな流れとなること」と説明している(p.102)。

4) 2013 年に文部科学省は，「子供」に表記を統一したが，厚生労働省は現在も「子ども」と表記している。筆者は，子どもの成長に対して包括的・多角的な視点を重視していきたいという考え・思いから本論文においての記述は「子ども」と表記している。

このような状況において効果的・効率的な予防や対策を講じるためには，技法やプログラムの根幹となる子どもの理解が原点である。

特に中学生の時期は，思春期と呼ばれ，精神的に親から離れていく心理的離乳と呼ばれる時期である。それとともに自己の在り方を他者との関係の中で模索することが増えてくる時期でもある。ゆえに同世代の集団における友人関係が重要な意味を持つ時期と言える。

また，中学生は自己肯定感が低くなりがちな時期とも言われ，自分に自信が持てないことで他者の評価を過剰に気にするという点で多感な時期である。栗田(2019)は，友人関係は，自己肯定感と関連があることを指摘している(p.25)。

しかし，文部科学省(2017)によると日本の子どもたちの自己肯定感は，低い状況にあることを指摘している(p.6)。我が国の中学生は，諸外国に比べ，自己肯定感が低いことも友人関係の構築に課題があるとされる要因の一つと考えられる。

赤川ほか（2016）は，中学生の友人関係について，男子生徒については，「他者からの否定的なフィードバックを経験することも多い学校という場では，自己価値の随伴性が高い生徒は，自尊感情や快感情の低下や不快感情の増加を経験しやすく」(p.8)なる傾向を指摘している。また，女子生徒については，「思春期女子に特徴的なチャムグループ的友人関係は，女子にとって必ずしも本意ではない，表面的な適応行動である可能性」(p8)を指摘している。作田（2016）は，「現代を生きる中学生は，対人意識においても私事的で親密的な意識を持ちつつ利他的な集団主義的傾向を併せ持っている」（p.53）と中学生のアンビバレントな他者意識について言及している。

このように自己成長に欠かせない自己評価，自己肯定感を育くむ上で，他者の存在は大きな影響を与えている。

筆者は，中学校のスクールカウンセラーとして，生徒たちの悩みを聞いているが，多くの生徒が同性代の対人関係に悩んでいた。過度に他者を意識しすぎると他者を優先し，自らの考え，思いを後回しにする交流分析理論の人生態度における「あなたはOK―私はOKでない」という立場をとることで息苦しさを感じている生徒もいた。また，自らの考えや思いを過度に大切にしてしまい，私は OK―あなたは OK でない」という立場をとり，孤立してしまう生徒もいた。さらに，他者からの否定的な評価や集団の同調圧力から身を守るために「あなたはOKではない―私はOKでない」という立場をとって孤立している生徒もいた。

生徒は，自己と他者との距離感に神経を擦り減らし綱渡り的な微妙なバランスをとり日々を過ごしている。

文部科学省(2019)は，国公私立小中学校の不登校の要因について，本人に係る要因と学校・家庭に係る要因のクロス表で分析している。小学校の不登校児童数 44,841 人のうち人間関係に課題を抱えている児童は，6，265 人(14.0%)であった。この中で，いじめによる割合は 4.3%，いじめを除く友人関係の割合は 66.6%であった。中学校の不登校生徒数 119,687 人のうち人間関係に課題を抱えている生徒は，22,374 人(18.7%)であった。この中で，いじめによる割合は 2.3%，いじめを除く友人関係は 74.0%であった(p.83)。

この結果から，いじめ，不登校における対人関係の中でも友人関係における子ども理解は重要な視点であると言える。

生徒は，前述したように学校，家庭，地域といった現実世界とともにインターネットやスマートフォンを介した SNS の世界に身を置きそれぞれの世界で親しい友だちと交流している可能性がある。

安藤ら(2005)は，「学校の友人などよりもバックグランドが豊富で，様々な知識を持つ可

能性が高いネット上の友人」(p.76)には，「勉強や進路の悩みなどの相談」(p.77)をしている可能性を示唆している。また，「ソーシャルサポートへのネット使用のポジティブな効果は，友人関係の孤独感と比較すると大きく」(p.77)「友人からのソーシャルサポートを 増加させることに有効であること」(p.77)に言及している。生徒にとって，インターネットやスマートフォン等におけるSNSによる友人からの影響は大きいことが推測される。

三浦（2008）は，「現実社会における自分とは異なる自分の一つに『本当の自分』があると考えられ」(p.138)，ネットコミュニティにおけるコミュニケーションを意味するCMC(Computer-Mediated Communication)では「本当の自分を表現しやすい」(p.138)ことと指摘している。現実世界では不可能な自分の唯一無二の自分を表出できる居場所をSNSに求めていると解することができる。インターネットやスマートフォンで繋がる友人は，情報への選択的接触により興味関心や価値観，思考傾向が類似しているネットコミュニティを介して出会える可能性は高いことも考えられる。

しかし，高坂(2010)は「友人と何かを共有することにより，自分らしさがなくなったと感じたり，相手にあわせなければならないと感じたりすること」(p.11)があり，「中学生に負担を感じさせている場合もある」(p.11)ことを示している。

1-2　目　的

いじめ，不登校など生徒指導の課題は，進展する情報化社会の状況を踏まえ，中学生の実態に即した生徒理解が基盤となる。そこで，前述したグループ・ダイナミクスにおいて大きな影響をもたらす生徒の親しい友だちについ中学生の現実世界と SNS の世界に着目した。本研究目的は，中学生の現実とSNS上の親しい友だちのつきあい方やイメージに相違があるのではないかという仮説に基づき，中学生の①SNSの利用の有無，②現実世界とSNSの世界から親しい友だちのつきあい方や形容詞からイメージをを明らかにすることとした。

この際，友だちではなく親しい友だちとしたのは，本研究計画時に大学の専門家から中学生にとって友だちのつきあい方やイメージでは広範囲になり漠然とした研究になるという指導・助言を受けた。そこで，中学生にとって相互に影響を与え合い成長し合える深い関係にある友だちに焦点化し，中学生が質問紙の回答において上記の内容を想定しやすい言葉として親しい友だちとした。

2. 方　法

2-1　調査対象

北海道内から抽出し学校長の許可を得た A 中学校 1～3 年生：生徒数 144 名，B 中学校 1～3 名：生徒数 103 名，合計 247 名の生徒を対象とした。A 中学校と B 中学校は，異なる地方公共団体の公立中学校であった。

2-2　調査期間

2019 年 4 月～5 月

2-3　手　順

2-3-1　質問紙の構成

フェイスシートには，学年，性別，友人人数，現実との友人との 1 日の会話平均時間（分），SNS での友人，SNS 歴について回答を求めた。

質問紙は，親しい友だちのつきあい方と親しい友だちを象徴するイメージについての 2 種類を質問紙として作成した。

友だちのつきあい方は，落合・佐藤（1996）が中学生を対象として実施した友だちのつきあい方調査の尺度の項目(p.57)を用いて現実

生活とSNSの世界それぞれに同様の質問紙を使用した。落合・佐藤（1996）の尺度の項目には「友達」と表記されているが本稿目的において記した観点から質問紙の教示文において親しい友だちとして回答するよう明記した。

また，SNS の世界については，生徒が質問紙への回答をイメージしやすいよう教示文に「SNS（スマホやパソコンで LINE や Twitter など他者と交流するツール全てにおいて）上だけで非現実場面（会ったことがない）においてのみ」を太字下線付きで記載した。

質問紙は，5 : とてもあてはまる，4 : ややあてはまる，3 : どちらとも言えない，2 : ややあてはまらない，1 : ほぼあてはまらないの 5 件法により回答を求めた。

親しい友だちのイメージを象徴する形容詞についての質問紙は，中学生の現実生活と SNS の世界における親しい友人のイメージを象徴する形容詞を提示し，多肢選択式で回答を求めた。多肢選択において使用した形容詞は，井上・小林（1985）の SD 法において使用頻度の高い形容詞（p.255）を参考とした。中学生が理解しやすいことに留意し，形容詞 63 語を選定し現実生活と SNS の世界それぞれに同様の質問紙を作成した。教示文には親しい友だちをイメージする形容詞を複数選択することが可能であることを記載した。

また，研究の趣旨や個人情報の取り扱いについて記載した保護者・生徒向け文書を生徒数分印刷した文書を A 中学校，B 中学校に郵送し質問紙配付時に配布を依頼した。

2-3-2　結果の分析

親しい友だちのつきあい方と親しい友だちのイメージを象徴する形容詞についての質問紙は，SNS の利用の有無別に中学生の現実生活と SNS の世界間に違いがあるか統計的な分析により検討を行った。統計解析には，BellCurve エクセル統計を使用した。

2-4　倫理的配慮

本調査研究は，北海道情報大学の生命倫理委員会に研究計画書を提出し，審査後に承認を得て調査を実施している。

本研究の調査前に A 中学校，B 中学校に訪問し，学校長に次の①～④の項目について説明し承諾を得た。①本研究の趣旨及び結果については統計的な処理を行い，学校名や個人名が特定されたり，成績や評価に影響したりしない，②結果を学会等において発表する可能性がある，③回答した質問紙は，本研究の目的以外では回答を使用しない，④生徒や保護者に対しては，北海道情報大学の生命倫理委員会の審査，承認を経て実施していることを文書で生徒，保護者に周知し，承諾を得られた生徒，保護者のみの自由回答とした。

3. 結　果

3-1　質問紙の回答率

A 中学校と B 中学校の 247 名中 158 名から回答を得た。158 名の回答から現実生活に関する質問紙から無記入または質問の意図と異なる回答 3 名分を削除し，155 名を有効回答とした（有効回答率 62.8%）。有効回答数中，男子生徒は 85 名，女子生徒は 70 名であった（表 1）（図 1）。

表 1　有効回答者数内訳

	男子	女子	合計
1 年生（名）	24	11	35
2 年生（名）	19	23	42
3 年生（名）	42	36	78
合　計（名）	85	70	155

3-2　SNS の利用実態

質問紙の有効回答 155 名中 99 名が SNS を利用していた。SNS を利用している年数は，概ね 1 年半～2 年半と利用歴は浅く，平均は

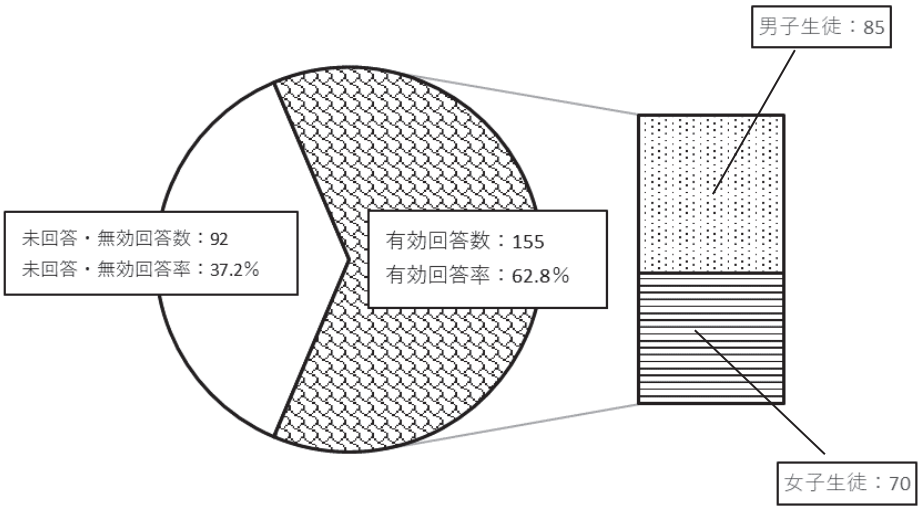

図 1　質問紙の回答率

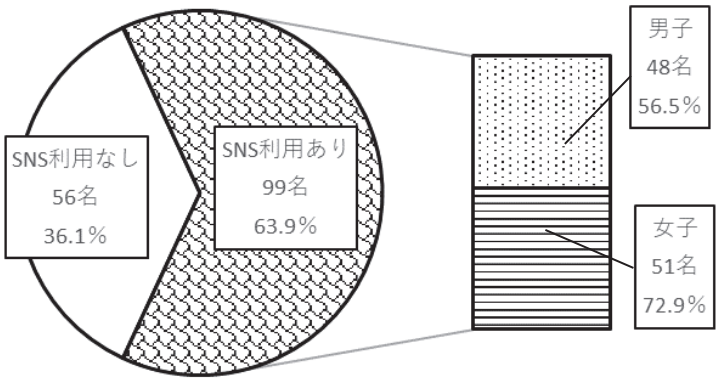

図 2　SNS の利用実態

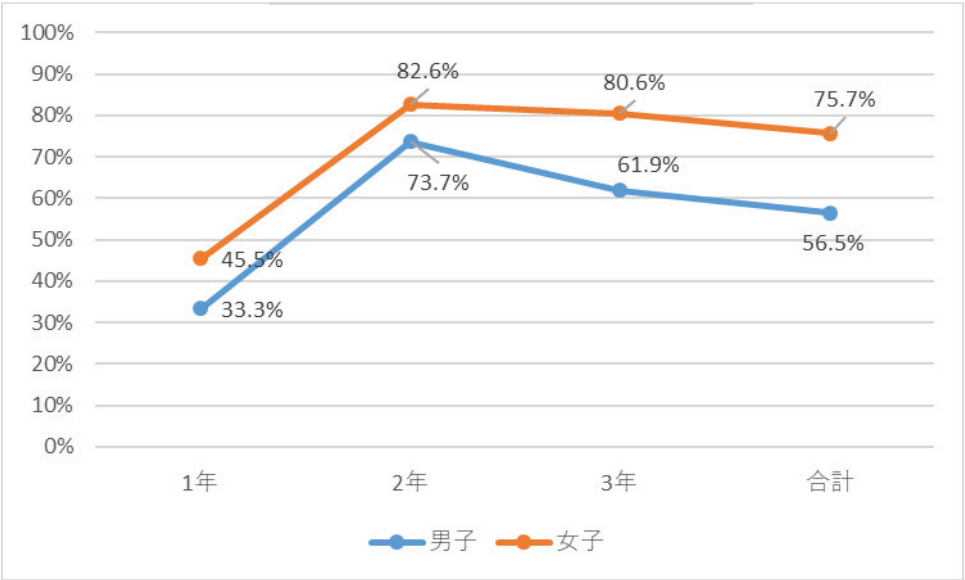

図 3　学年別・男女別 SNS 利用者数

2.6 年であった。男女別の SNS 利用の結果は，男子 48 名（56.5%），女子 51 名（72.9%），合計 99 名（63.9%）であった（図 2）。

また，学年別・男女別の利用割合は，全ての学年においても女子の割合が高く，男女とも中学校 1 年から 2 年にかけ急激に割合が高くなっていた（図 3）。

3-3　SNS 利用の有無と友人数

フェイスシートの友人数を問う質問に対する回答は，SNS の利用のない生徒は 12 名（回答率 21.4%）であり，SNS の利用のある生徒は 74 名（回答率 74.7%）であった。SNS を利用している生徒の回答率が低かった。詳細な理由の検討は必要であるが，①現実世界と SNS の世界の親しい友だちが共通しているためどちらの人数としてよいかに戸惑った，②現実世界と SNS の世界の親しい友だちのつきあい方やイメージの違いが大きく明確な人数を特定しづらかったことなどがあるのではないかと考えた。そこで，友人数については参考値としてグラフに表した（図 4）。

SNS を利用しているか利用していないかでは，人数の分布に違いが認められた。SNS を利用している生徒は，友人数が 6～10 人が最も多く，0 人や 46 人以上と回答した生徒もいた。利用していない生徒は，1～5 人と回答した生徒が最も多く，続いて 21 名～25 名と回答した生徒が多かった。

3-4　中学生の現実生活と SNS の世界における親しい友だちのつきあい方

中学生は，現実世界と SNS の世界における親しい友だちのつきあい方に差異はあるのではないかという仮説の検証を行うために，落合・佐藤（1996）の友だちのつきあい方尺度から作成した質問紙の結果について統計的分析を行った。

3-5　現実世界における親しい友だちのつきあい方

現実世界における友だちのつきあい方の回答を集計し，35 項目を主因子法による因子分析を行ったところ，固有値 1.0 以上の 9 因子が抽出された。また，落合・佐藤（1996）による分類における観点を参考に各因子にける質問内容から検討し 6 因子が適当と判断されたため，因子数を 6 因子に指定して主因子法 promax 回転による因子分析を行った。因子分析の結果から，因子負荷量が 0.38 未満の「友達とは何でも本音で話し合うようにしている」「みんなとぶつかり合うのは避けている」「少しぐらい傷つくことがあっても，自分のありのままの姿で接したい」「だれにでも好かれる

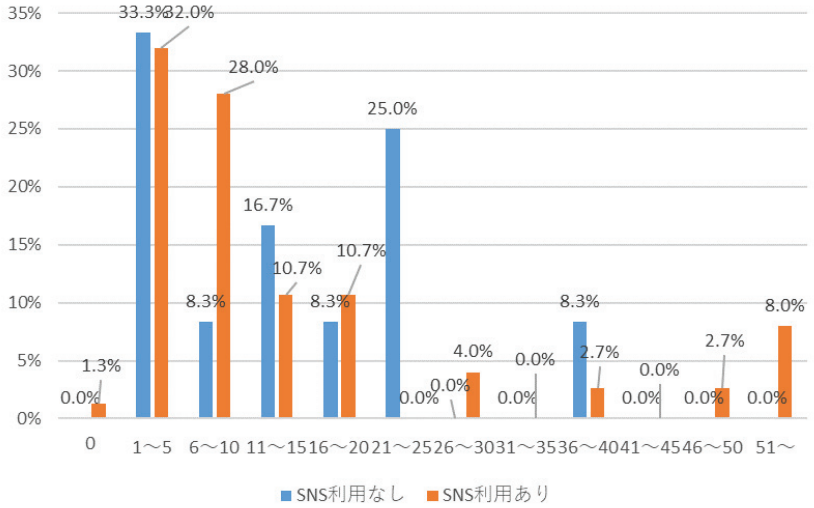

図 4　SNS 利用の有無による親しい友だちの割合(参考値)

のは無理だと思っている」「いやだなと思っている人とはつきあわないようにしている」「友達と本音でぶつかり合っても平気である」の 6 項目を削除し, 再度 29 項目で主因子法 promax 回転による因子分析を行ったところ, やはり固有値 1.0 以上の 6 因子が抽出されたため, 因子数 6 因子に指定して同様の因子分析を行った。29 項目に対する 6 因子解での累積寄与率 59.47%であった。

A-F1 因子は,「友達にはありのままの自分は出せない」「友達と本音で話すのは避けている」「友達に自分のすべてをさらけ出すのは危険である」など, 親しい友だちにも心を開いて接することができない不安なつきあい方を表す因子と解釈された。そこで,「不安他者尊重志向」と命名した。

A-F2 因子は,「どんな友達とも仲良しでいたい」「どんな友達とも楽しくつきあいたい」「どんな人とも仲良くしようと思う」など, 楽しさという情緒を重視した協調によるつきあい方を表す因子と解釈された。そこで,「情緒的協調志向」と命名した。

A-F3 因子は,「友達と意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない」「友達と意見を交わしあっても．それほどまどわされない」「友達と意見が対立しても, 自信を無くさないで話し合える」など, 自己の存在を大切にしたつきあい方を表す因子と解釈された。そこで,「自己表現重視志向」と命名した。

A-F4 因子は,「みんなと違うことはしたくない」「みんなと意見を合わせようと思う」「みんなと何でも同じでいたい」など, 自分より親しい友だちを優先し同調するつきあい方が強い傾向を表す因子と解釈された。そこで,「同調迎合志向」と命名した。

A-F5 因子は,「友達と本音を言い合うことで, 傷ついても仕方ない」「友達とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい」「友達と本当の姿を見せ合うことで．少しくらい傷ついてもかまわない」など, 傷つくことを恐れず本音と本音の交流により，深い信頼関係を築いていくつきあい方を表す因子と解釈された。そこで,「信頼構築志向」と命名した。

A-F6 因子は,「みんなに好かれていたい」「みんなから愛されていたい」は, 親しい友だちから認められ好意をもたれるようなつきあい方を表す因子と解釈された。そこで,「好意希求志向」と命名した。

次に, 6 因子の各因子において Cronbach の α 係数を算出した。結果, A-F1 因子 0.84, A-F2 因子は 0.91, A-F3 因子は 0.88, A-F4 因子は 0.76, A-F5 因子は 0.78, A-F6 因子は 0.93 といずれも充分な内的一貫性が確認された（表 2）。

3-6　現実世界の親しい友だちのつきあい方における SNS 利用の有無と性別

SNS の利用の有無や性別と現実世界の親しい友だちのつきあい方に違いがないかを確認するため，前述で実施した因子分析の因子得点を SNS の利用の有無(2)×性別(2) ×親しい友だちのつきあい方因子(6)に関する平均値と標準偏差を算出した（表 3）。

次に，親しい友だちのつきあい方 6 因子と SNS の利用別における分散分析を行った。結果，A-F1～A-F6 因子の全てにおいて，ルービン検定により等分散性が認められた。

交互作用に関しては，親しい友だちのつきあい方 6 因子と SNS の利用の有無において有意な差が認められた($F(5, 743)=3.91$, $p<.01$)。親しい友だちのつきあい方 6 因子と性別には交互作用が認められなかった($F(5, 743)=0.33$, n.s.)。そこで，親しい友だちのつきあい方得点ごとに SNS の利用の有無の差を単純主効果から検討した。

A-F1 因子は，主効果に有意な差が認められなかった($F(1, 720)=1.52$, n.s.)。

A-F2 因子は，主効果に有意な差が認められなかった($F(1, 720)=0.00$, n.s.)。

表２　現実生活の親しい友だちのつきあい方因子分析結果（主因子法・Promax 回転・6 因子指定）

項　目		A-F1	A-F2	A-F3	A-F4	A-F5	A-F6
友達にはありのままの自分は出せない		.81	-.09	.15	.07	-.12	.05
友達と本音で話すのは避けている		.79	-.11	.03	.10	-.03	.05
友達に自分のすべてをさらけ出すのは危険である		.76	.10	-.06	-.23	.08	-.04
友達とは，　互いに傷つくような本音での話はしないようにしている		.65	.09	.02	-.11	.07	.10
傷つきたくないので，友達には本当の姿を見せられない		.65	-.09	-.06	.20	-.08	-.01
友達とは本音で話さないほうが無難だ		.64	.09	.01	.10	.05	-.08
友達と分かり合おうとして傷つきたくない		.55	.13	-.02	.12	-.05	-.04
友達には自分の考えていることを全部言う必要はない		.47	-.01	-.11	-.20	.07	.02
自信をなくされるくらいなら，友達とかかわらないほうがいい		.38	-.33	.05	.10	-.03	-.02
どんな友達とも仲良しでいたい		.10	.91	-.13	-.05	.07	.03
どんな友達とも楽しくつきあいたい		.03	.89	-.14	-.03	.02	.00
どんな人とも仲良くしようと思う		.08	.85	.06	-.03	.01	-.09
どんな人ともずっと友達でいたい		-.09	.69	.10	.18	-.22	.09
どんな友達とも協調し合いたい		-.07	.63	.24	.25	-.05	.06
友達と意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない		-.07	-.10	.94	.04	-.04	.06
友達と意見を交わしあっても．　それほどまどわされない		.18	.00	.79	.04	.07	-.16
友達と意見が対立しても，自信を無くさないで話し合える		-.10	.02	.78	-.10	.01	.02
友達と本音でぶつかり合っても，　自信をなくしてしまうことはない		-.06	-.02	.74	-.10	.04	.06
みんなと意見が違っても，できるだけ自分の意見を言うようにしている		.08	.21	.50	-.18	.15	.04
みんなと違うことはしたくない		-.02	-.04	-.08	.89	.05	-.05
みんなと意見を合わせようと思う		.03	.02	-.14	.73	-.05	-.03
みんなと何でも同じでいたい		.04	.17	.13	.69	.08	.02
友達に自分を理解してもらえないと自信がもてない		-.04	-.01	-.28	.45	.09	.20
友達と本音を言い合うことで，傷ついても仕方ない		.17	-.12	.00	.08	.80	.05
友達とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい		-.25	.06	.10	.17	.69	-.07
友達と本当の姿を見せ合うことで．　少しくらい傷ついてもかまわない		-.03	.04	.03	.01	.67	.05
友達と分かり合おうとして傷ついても仕方ない		.01	-.04	.05	-.07	.59	-.02
みんなに好かれていたい		.03	.04	-.04	-.02	.06	.94
みんなから愛されていたい		.00	.05	.03	.05	-.03	.89
因子間相関	A-F2	-.17					
	A-F3	-.24	.20				
	A-F4	.19	.13	-.17			
	A-F5	-.24	.27	.32	-.30		
	A-F6	-.08	.44	.08	.19	.08	
	α係数	.84	.91	.88	.76	.78	.93

※因子分析において、因子分析ごとの因子を区別するため SNS の利用の有無に関わらない現実世界の因子を A、SNS を利用している生の現実世界を B、SNS を利用している生徒の SNS の世界の因子を C として各因子 F の前に記している。

A-F3 因子は，主効果に有意な差が認められた。

(F(1，720)=9.39，p<.01)。多重比較の結果，SNS を利用している生徒に比して SNS を利用していない生徒が低く，有意な差が認められた(p<.01)。

A-F4 因子は，主効果に有意な差が認められなかった(F(1，720)=2.02，n.s.)。

A-F5 因子は，主効果に有意な差が認められた(F(1, 720)=6.71 p<.01)。多重比較の結果, SNS を利用している生徒に比して SNS を利用していない生徒が高く，有意な差が認められた(p<.01)。

A-F6 因子は，主効果に有意な差が認められなかった(F(1，720)=0.02，n.s.)。

中学生は，SNS の利用の有無による現実世界の親しい友だちのつきあい方は，A-F3「自己表現重視志向」と A-F5 の「信頼構築志向」の質問項目への回答差が明らかになった。

3-7　SNS を利用している生徒の現実世界における親しい友だちのつきあい方

前述の結果から生徒の SNS の利用の有無により現実世界の親しい友だちのつきあい方が異なっていた。そこで，SNS を利用している生徒を対象として現実世界と SNS の世界における親しい友だちのつきあい方の違いを明らかにした。

現実世界における友だちのつきあい方の回答を集計し, 35 項目を主因子法による因子分析を行ったところ, 固有値 1.0 以上の 7 因子が抽出された。また, 各因子にける質問内容から検討し 5 因子が適当と判断されたため, 因子数を 5 因子に指定して主因子法 promax 回転による因子分析を行った。因子分析の結果から, 因子負荷量が 0.35 未満の「友達には自分の考えていることを全部言う必要はない」「少しぐらい傷つくことがあっても，自分のありのままの姿で接したい」「だれにでも好かれるのは無理だと思っている」「いやだなと思っている人とはつきあわないようにしている」の 4 項目を削除し, 再度 31 項目で主因子法 promax 回転による因子分析を行ったところ, やはり固有値 1.0 以上の 5 因子が抽出されたため, 因子数 5 因子に指定して同様の因子分析を行った。31 項目に対する 5 因子解での累積寄与率 62.70%であった。

表 3　現実世界の SNS の利用と性別における因子得点平均値と標準偏差

		SNS利用あり	SNS利用なし
A-F1	男子	0.03(0.77)	-0.21(1.08)
	女子	0.12(1.01)	-0.02(0.99)
	全体	0.07(0.90)	-0.14(1.04)
A-F2	男子	-0.09(1.16)	0.02(0.89)
	女子	-0.02(0.99)	-0.14(0.77)
	全体	0.00(0.94)	-0.14(1.04)
A-F3	男子	-0.26(0.80)	0.43(0.93)
	女子	-0.14(1.06)	0.20(0.91)
	全体	-0.19(0.94)	-0.35(0.92)
A-F4	男子	0.14(0.81)	-0.26(0.86)
	女子	0.05(0.97)	-0.02(1.23)
	全体	0.10(0.89)	-0.17(1.00)
A-F5	男子	-0.12(0.73)	0.24(0.91)
	女子	-0.20(1.05)	0.38(0.77)
	全体	-0.16(0.91)	0.30(0.85)
A-F6	男子	-0.07(1.00)	-0.03(0.90)
	女子	0.05(0.91)	0.10(1.20)
	全体	-0.01(0.95)	0.01(1.01)

※数値は因子得点の平均値，（ ）は標準偏差

B-F1 因子は，「友達にはありのままの自分は出せない」「友達と本音で話すのは避けている」「友達に自分のすべてをさらけ出すのは危険である」など, 他者への信頼がなく，距離をおいて接し自らを防衛するつきあい方を表す

因子と解釈され「自己防衛志向」と命名した。

B-F2 因子は，「どんな友達とも仲良しでいたい」「どんな友達とも楽しくつきあいたい」「どんな人ともずっと友だちでいたい」など，協調しつつも自らが優しくされる願望を表す因子と解釈された。B-F2 は，調査全体を分析した現実世界の A-F2 因子と A-F6 因子が混在している状況でもあることから「好意希求的協調志向」と命名した。

B-F3 因子は，「友達と意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない」「友達と意見を交わしあっても．それほどまどわされない」「友達と意見が対立しても，自信を無くさないで話し合える」など，調査全体を分析した現実世界の A-F3 因子と同様の因子と解釈され「自己表現重視志向」と命名した。

B-F4 因子は，「みんなと違うことはしたくない」「みんなと意見を合わせようと思う」「みんなと何でも同じでいたい」など，調査全体を分析した現実世界の A-F4 因子の傾向であったが，「友達と本音でぶつかり合っても平気である」や「友達に自分を理解してもらえないと自信がもてない」といったアンビバレントな質問項目も含まれており同調しつつも葛藤が生じるつきあい方を表す因子と解釈された。そこで，「葛藤同調志向」と命名した。

B-F5 因子は，「友達と本音を言い合うことで，傷ついても仕方ない」「友達と本当の姿を見せ合うことで．少しくらい傷ついてもかまわない」「友達とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい」など，調査全体を分析した現実世界の A-F5 因子と類似した因子ではあるが，相互の深い内面の交流を重視したつきあい方を表す因子と解釈された。そこで，「内面重視志向」と命名した。

次に，5 因子の各因子において Cronbach の α 係数を算出した。結果，B-1 因子 0.86，B-F2 因子は 0.89，B-F3 因子は 0.89，B-F4 因子は 0.73，B-F5 因子は 0.77 といずれも充分な内的一貫性が確認された（表 4）。

3-8　SNS を利用している生徒の SNS の世界における親しい友だちのつきあい方

SNS を利用している生徒の SNS の世界における親しい友だちのつきあい方の質問の回答を集計し，35 項目を主因子法による因子分析を行ったところ，固有値 1.0 以上で 9 因子が抽出された。また，落合・佐藤（1996）による分類の観点を参考に各因子における項目内容における検討し 5 因子が適当と判断されたため，因子数を 5 因子に指定して主因子法 promax 回転による因子分析を行った。

因子分析の結果から，因子負荷量が 0.38 未満の「友達とは何でも本音で話し合うようにしている」「友達と分かり合おうとして傷つきたくない」「だれにでも好かれるのは無理だと思っている」「いやだなと思っている人とはつきあわないようにしている」「みんなと意見が違っても，できるだけ自分の意見を言うようにしている」の 5 項目を削除し，再度 30 項目で主因子法 promax 回転による因子分析を行ったところ，やはり固有値 1.0 以上で 5 因子が抽出されたため，因子数を 5 因子に指定して同様の因子分析を行った。30 項目に対する 5 因子解での累積寄与率 69.54％であった。

C-F1 因子は，「友達と本音でぶつかり合っても，自信をなくしてしまうことはない」「友達と意見が対立しても，自信を無くさないで話し合える」など，現実世界の B-F3 因子とより自尊感情を重視したつきあい方を表す因子と解釈された。そこで C-F1 因子を「自尊感情重視志向」と命名した。

C-F2 因子は，「みんなに好かれていたい」「みんなから愛されていたい」「どんな友達とも仲良しでいたい」など，現実世界の B-F2 因子と同様の項目内容ではあった。そこで，C-F2 因子も「好意希求的協調志向」と命名した。

C-F3 因子は，「友達にはありのままの自分

表４　SNS を利用している生徒の現実の世界の親しい友だちのつきあい方因子分析結果（主因子法・Promax 回転・５因子指定）

項　　目		B-F1	B-F2	B-F3	B-F4	B-F5
友達にはありのままの自分は出せない		.84	-.05	.16	.08	-.06
友達と本音で話すのは避けている		.80	-.10	.03	.12	.01
友達に自分のすべてをさらけ出すのは危険である		.75	.00	-.05	-.17	.15
傷つきたくないので，友達には本当の姿を見せられない		.70	-.04	-.08	.16	-.16
友達とは，　互いに傷つくような本音での話はしないようにしている		.69	.24	-.05	-.24	.07
友達とは本音で話さないほうが無難だ		.63	.03	.00	.14	.07
友達と分かり合おうとして傷つきたくない		.60	.20	-.05	.10	-.09
友達には自分の考えていることを全部言う必要はない		.53	.00	.02	-.07	.02
自信をなくされるくらいなら，友達とかかわらないほうがいい		.49	-.30	.16	.00	-.06
みんなとぶつかり合うのは避けている		.45	-.04	-.07	.15	-.05
どんな友達とも仲良しでいたい		.11	.86	-.04	-.01	.06
どんな友達とも楽しくつきあいたい		.04	.83	.02	.04	-.01
どんな人ともずっと友達でいたい		-.15	.77	.08	.16	-.23
どんな人とも仲良くしようと思う		.07	.70	.11	-.06	.07
みんなに好かれていたい		.02	.69	-.13	-.02	.05
みんなから愛されていたい		.02	.68	-.12	-.03	.03
どんな友達とも協調し合いたい		-.09	.62	.25	.24	-.06
友達と意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない		-.01	.01	.90	-.04	-.03
友達と意見を交わしあっても．　それほどまどわされない		.17	-.15	.85	.09	.11
友達と意見が対立しても，自信を無くさないで話し合える		-.06	.07	.85	-.04	-.08
友達と本音でぶつかり合っても，　自信をなくしてしまうことはない		-.10	.06	.80	-.15	.00
みんなと意見が違っても，できるだけ自分の意見を言うようにしている		.08	.25	.38	-.23	.27
みんなと違うことはしたくない		.04	-.05	-.09	.88	-.06
みんなと意見を合わせようと思う		.07	.02	-.09	.79	-.02
みんなと何でも同じでいたい		.09	.20	.06	.70	.10
友達と本音でぶつかり合っても平気である		-.24	-.07	.22	.38	.34
友達に自分を理解してもらえないと自信がもてない		-.10	.23	-.34	.35	.08
友達と本音を言い合うことで，傷ついても仕方ない		.14	-.05	-.01	.07	.84
友達と本当の姿を見せ合うことで．　少しくらい傷ついてもかまわない		.02	.08	-.09	-.04	.73
友達とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい		-.23	.03	.12	.17	.65
友達と分かり合おうとして傷ついても仕方ない		-.05	-.09	.04	-.16	.46
因子間相関	B-F2	-.12				
	B-F3	-.30	.16			
	B-F4	.14	.19	-.22		
	B-F5	-.16	.19	.37	-.18	
	α係数	.86	.89	.89	.73	.77

表５　SNS を利用している生徒の SNS の世界の親しい友だちのつきあい方因子分析結果（主因子法・Promax 回転・５因子指定）

項　目		C-F1	C-F2	C-F3	C-F4	C-F5
友達と本音でぶつかり合っても，　自信をなくしてしまうことはない		.92	.04	.06	-.05	.07
友達と意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない		.86	.09	.04	-.06	.11
友達と意見が対立しても，自信を無くさないで話し合える		.81	.02	-.01	-.07	.13
友達と意見を交わしあっても．　それほどまどわされない		.75	-.10	.09	.07	.06
友達と本音でぶつかり合っても平気である		.56	-.01	.11	.10	.33
少しぐらい傷つくことがあっても，自分のありのままの姿で接したい		.38	.29	-.02	.10	.31
みんなに好かれていたい		.02	.90	-.04	.18	-.27
みんなから愛されていたい		-.03	.87	.04	.22	-.28
どんな友達とも仲良しでいたい		-.13	.74	.04	-.16	.43
どんな友達とも楽しくつきあいたい		-.07	.71	.03	-.13	.44
どんな友達とも協調し合いたい		.22	.70	-.07	-.06	.04
どんな人ともずっと友達でいたい		.04	.68	-.04	.02	.13
どんな人とも仲良くしようと思う		.03	.62	.14	.09	.34
友達にはありのままの自分は出せない		-.09	-.11	.87	.22	-.08
友達に自分のすべてをさらけ出すのは危険である		-.05	.10	.85	-.19	.17
友達と本音で話すのは避けている		-.25	-.06	.81	.15	.22
傷つきたくないので，友達には本当の姿を見せられない		.05	-.09	.78	.07	-.12
友達には自分の考えていることを全部言う必要はない		.23	.22	.76	-.11	-.15
友達とは，　互いに傷つくような本音での話はしないようにしている		.22	.12	.71	-.17	-.06
友達とは本音で話さないほうが無難だ		-.06	-.01	.62	.05	.27
自信をなくされるくらいなら，友達とかかわらないほうがいい		.29	-.17	.54	.02	-.12
みんなと意見を合わせようと思う		-.10	.06	.09	.84	-.01
みんなと違うことはしたくない		.11	.02	-.02	.76	.15
みんなと何でも同じでいたい		.11	.16	-.11	.69	.06
友達に自分を理解してもらえないと自信がもてない		-.05	-.01	.06	.53	.33
友達と本音を言い合うことで，傷ついても仕方ない		.31	-.08	.10	.07	.70
友達と分かり合おうとして傷ついても仕方ない		.35	-.15	.02	.13	.67
友達と本当の姿を見せ合うことで．　少しくらい傷ついてもかまわない		.30	.19	-.15	.11	.59
友達とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい		.34	.13	-.20	.17	.57
因 子 間 相 関	C-F2	.43				
	C-F3	.09	-.08			
	C-F4	.17	.26	.08		
	C-F5	.34	.29	.07	.23	
	α係数	.93	.92	.91	.85	.90

は出せない」「友達に自分のすべてをさらけ出すのは危険である」「友達と本音で話すのは避けている」など，現実世界 B-F1 因子「自己防衛志向」と類似する部分が多かった。しかし，現実世界における他者への信頼感が低い状況から他者回避のために距離をおき自らを防御するつきあい方を表す因子と解釈された。そこで C-F3 因子を「自己防衛志向」と命名した。

C-F4 因子は，「みんなと意見を合わせようと思う」「みんなと違うことはしたくない」「みんなと何でも同じでいたい」など，自らに自信がなく他者を優先してしまうつきあい方を表す因子と解釈された。この因子は，A-F4 因子に加え，その背景に自己肯定感の低さがあると因子であると解釈された。そこで C-F4 因子を「低自己肯定的迎合志向」と命名した。

C-F5 因子は，「友達と本音を言い合うことうで，傷ついても仕方ない」「友達とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい」など B-5 因子と同じ項目内容であった。そこで，C-F5 因子を「内面重視志向」と命名した。

次に，5 因子の各因子において Cronbach の α 係数を算出した。その結果，第 1 因子 0.93，第 2 因子は 0.92，第 3 因子は 0.91，第 4 因子は 0.85，第 5 因子は 0.90 といずれも充分な内的一貫性が確認された（表 5）。

3-9　SNS の利用を利用している生徒の現実世界と SNS の世界における親しい友だちのつきあい方

SNS を利用している生徒の現実世界と SNS の世界における親しい友だちのつきあい方の各 5 因子と因子内の質問項目から類似した因子の関係を示す（図 5）。

次に現実世界と SNS の世界における因子間の関連をみるためにピアソンの積率相関係数から検討した（表 6）。

現実世界 B-F1 因子は，SNS の世界 C-F3 因子と正の相関が認められた (r=.57,p<.01)。

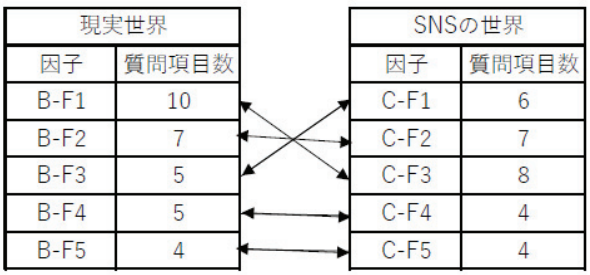

図 5　現実世界と SNS の世界の因子の類似と質問項目数の比較

表 6　現実世界と SNS の世界における因子間相関

	B-F1	B-F2	B-F3	B-F4	B-F5	C-F1	C-F2	C-F3	C-F4	C-F5
B-F1	-	.05	-.21	.26	-.18	.15	-.21	.57	-.18	.08
B-F2		-	.44	.15	.29	-.27	.77	-.06	.20	-.48
B-F3		**	-	-.09	.19	.53	-.23	.13	-.38	.08
B-F4				-	.05	-.19	.09	-.25	.32	.06
B-F5		*			-	.03	-.42	.14	.05	.47
C-F1		*	**			-	.37	-.03	.17	.26
C-F2		**			**	**	-	.07	.00	.48
C-F3	**							-	.32	-.11
C-F4			**	*				*	-	.30
C-F5		**			**		**		*	-

*,P<0.05 **,P<0.01

現実世界 B-F2 因子は，SNS の世界 C-F1 因子と弱い負の相関が認められ(r=.-27,p<.05), C-F2 因子とかなり強い正の相関が認められ(r=.77,p<.01), C-F5 因子と負の相関が認められた(r=.-48,p<.01)。

現実世界 B-F3 因子は，SNS の世界 C-F1 因子と正の相関が認められ(r=.53,p<.01), C-F4 因子と弱い負の相関が認められた(r=.-38,p<.05)。

現実世界 B-F4 因子は，SNS の世界 C-F4 因子と弱い正の相関が認められた。(r=.32,p<.05)。

現実世界 B-F5 因子は，SNS の世界 C-F2 因子と負の相関が認められ(r=.42,p<.01), C-F5 因子と正の相関が認められた(r=.47,p<.01)。

このように現実世界と SNS の世界において外見上の類似した因子であっても異なる関連が見られた。

また，質問内容に着目すると SNS の世界 C-F4 因子において「みんなと意見を合わせようと思う」「友達と本音でぶつかり合っても平気

である」というアンビバレントな内容が同一因子に見られた。

3-10　生徒の現実生活と SNS の世界における親しい友だちのイメージ

3-10-1　形容詞選択の結果

現実世界と SNS の世界における親しい友だちのイメージを象徴する形容詞に違いがあるか検討するために，63 語の形容詞の生徒の選択率から検討した。

この結果，SNS を利用していない生徒の現実世界と SNS の利用している生徒の現実世界と SNS の利用のある生徒の SNS の世界という 3 つのカテゴリーすべてにおいて出現率が低い形容詞選択率 20%未満を削除し 51 語を抽出した。生徒の選択率 20%未満の形容詞は，「重い」「強い」「美しい」「気持ちのよい」「速い」「派手な」「大きい」「しんちょうな」「すばやい」「落ち着いた」「まとまった」「敏感な」の 12 語であった。

SNS を利用していない生徒と SNS を利用している生徒が選択した現実世界における親しい友だちのイメージを象徴する形容詞について比較すると，SNS の利用の有無において選択率に違いが認められた（表 7）。

また，SNS を利用している生徒の現実世界と SNS の世界における親しい友だちのイメージを象徴する形容詞を比較すると現実世界の選択率が大幅に高かった。

SNS を利用している生徒の選択率が現実世界より SNS の世界において高い形容詞は，「軽い」「鋭い」「社交的な」のみであった（表 8）。

表 7　SNS の利用の有無による現実世界の親しい友だちのイメージを象徴する形容詞の選択率比較

SNS の利用有無による選択率の差	形容詞項目	語数 (%)
利用なし＞利用あり（30%以上）	静かな，軽い，親切な，きれいな，冷静な，勇敢な，社交的な，思いやりのある，あつい	9 (17.6)
利用なし＞利用あり（20%～30%未満）	面白い，鋭い，たくましい，安定した，きちんとした，深みのある，幸福な	7 (13.7)
利用なし＞利用あり（10%～20%未満）	暖かい，まじめな，素直な，充実した，安全な，頭の良い	6 (11.8)
利用なし＞利用あり（10%未満）	責任感のある，嬉しい，意欲的な，かわいらしい，強気な，豊かな，にぎやかな，優しい	8 (15.7)
利用なし＜利用あり（10%未満）	のんびりした，ゆかいな，積極的な，安心な	4 (7.8)
利用なし＜利用あり（10%～20%未満）	活発な，好きな，清潔感のある，頼もしい，心の広い，はっきりとした，優れている，自由な，生き生きとした	9 (17.6)
利用なし＜利用あり（20%～30%未満）	おしゃべりな，優しい，感じのよい	3 (5.9)
利用なし＜利用あり（30%以上）	明るい，陽気な，楽しい，元気な，親しみやすい	5 (9.8)

表８　SNS を利用している生徒の現実世界と SNS の世界における親しい友だちのイメージを象徴する形容詞の選択率比較

形容詞選択率の差	形容詞項目	語数 (%)
現実世界＞SNS の世界 （30%以上）	明るい，陽気な，活発な，面白い，楽しい，優しい，思いやりのある，元気な，	8 (15.7)
現実世界＞SNS の世界 （20%～30%未満）	陽気な，親切な，ゆかいな，素直な，おしゃべりな，はっきりとした，親しみやすい，自由な，生き生きとした，自由な，にぎやかな	11 (21.6)
現実世界＞SNS の世界 （10%～20%未満）	暖かい，積極的な，好きな，頼もしい，安定した，責任感のある，清潔感のある，うれしい，かわいらしい，のんびりとした，勇敢な，心の広い，幸福な，優れている，豊かな，安心な，頭の良い	17 (33.3)
現実世界＞SNS の世界 （10%未満）	静かな，たくましい，きれいな，きちんとした，深みのある，冷静な，意欲的な，強気な，感じのよい，あつい，充実した，安全な	12 (23.5)
現実世界＝SNS の世界	鋭い，社交的な	2 (3.9)
現実世界＜SNS の世界 （10%未満）	軽い	1 (2.0)

3-10-2　双対尺度法による形容詞の分類

生徒が親しい友だちのイメージについて選択した形容詞について，SNS を利用していない生徒の現実世界，SNS の利用している生徒の現実世界，SNS を利用している生徒の SNS の世界への対応関係について双対尺度法により検討した。

SNS の利用の有無，現実生活と SNS の世界における上記 3 つのカテゴリー（行）と 51 の形容詞（列）の選択数の 3×51 のデータ行列を作成した。データ行列への双対尺度法適用の結果，2 つの解（双対尺度法では，行数 1 の解が算出される）において第 1 解が，全分散の 92.08%を説明しており，その貢献度が極めて大きかった(表 9)。

表 9 の 2 つの解に対して SNS の利用の有無と現実生活と SNS の世界における 3 つのカテゴリー（行）と 51 語の形容詞（列）に与えられた重みの布置図から対応関係が認められた（図 6)。

SNS を利用していない生徒の現実世界については，「きれいな」「深みのある」「静かな」「冷静な」「勇敢な」との対応関係が特に近かった。

表９　双対尺度法による２つの解

統計量	第１解	第２解
相関比 η^2	0.172	0.014
寄与率	0.922	0.077
累積寄与率	92.27%	100.00%
χ^2 値	586.51	45.09
df（自由度）	51	49

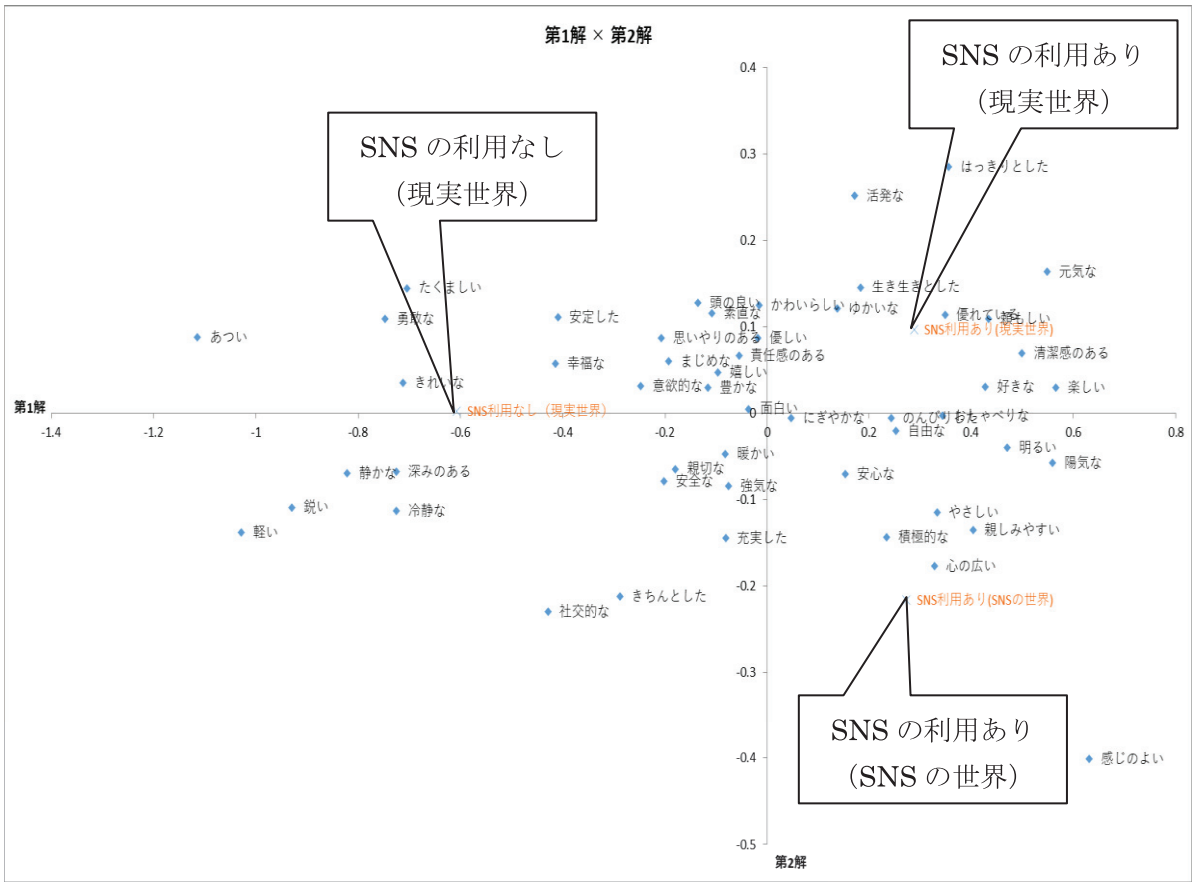

図 6　現実世界と SNS の世界における双対尺度法による親しい友だちをイメージする形容詞の対応関係

しかし，出現率が高かった「暖かい」「面白い」「素直な」「責任感のある」「嬉しい」「かわいらしい」「優しい」「強気な」「豊かな」「充実した」「にぎやかな」「頭の良い」は双対尺度法において SNS の世界との対応関係が近かった。

SNS を利用している生徒の現実世界については，「優れている」「頼もしい」「生き生きとした」「ゆかいな」「清潔感のある」「好きな」「のんびりした」「おしゃべりな」「自由な」との対応関係が特に近かった。

SNS の利用有無における現実世界の親しい友だちのイメージを象徴する形容詞の出現率における相違を示した表 7 の 51 語のうち双対尺度法の対応関係において 21 語は現実世界と SNS の世界の対応関係では異なった結果となり 30 語の形容詞が共通していたことが明らかになった。

SNS を利用している生徒は，現実世界と SNS の世界における出現率の相違を示した表 8 の 51 語のうち現実世界における出現率が高かった「心の広い」「感じの良い」「積極的な」「親しみやすい」は双対尺度法において SNS の世界との対応関係が近かった。

4. 考　察

4-1　生徒の現実世界と SNS 世界における親しい友だちとのつきあい方

本研究は，生徒理解を深める一側面として現実世界と SNS の世界における友だちつきあい方の相違を明らかにした。

調査対象の生徒において男女差は認められなかったが，SNS の利用の有無により，現実世界における親しい友だちとのつきあい方の違いが明らかになった（10 ページの表 3 参照）ことは，中学生の時期における生徒理解の重

要な視点になると考える。

本調査結果からSNSを利用している生徒の割合は，1年から2年に学年が上がる時に大幅に増えていることから（6ページの図3参照），SNSの利用とともに親しい友だちのつきあい方が大きく変化していく可能性がある。

学級においてSNSを利用している生徒と利用していない生徒が混在し，それに伴い親しい友だちとのつきあい方にも変化が生じてくると言える。この状況は，学級内の対人関係を中心としたグループ・ダイナミクスに大きな影響を及ぼす可能性がある。

しかし，1年から2年時におけるSNSの利用増加が全国的傾向であるかについては，地域，家庭環境，学校の実態からさらに詳細かつ広範囲な検証が必要である。

生徒理解においては，SNSの利用の有無で相違が認められたのは，現実世界のA-F3因子「自己表現重視志向」とA-F5因子「信頼構築志向」であった。A-F3因子とA-F5因子SNSの質問項目はどちらの自己表現を重視していた。SNS利用による生徒の自己表現が変化していくことに着目することも生徒理解において重要な視点となると考える。

4-2 SNSを利用している生徒の現実世界とSNSの世界での親しい友だちのつきあい方

SNSを利用している生徒の現実世界とSNSの世界での親しい友だちのつきあい方を比較したところ，どちらも5因子に分類され類似因子間の正の相関も見られた。

しかし，現実世界とSNSの世界の類似していない因子間相関や質問項目の相違から親しい友だちのつきあい方は異なる可能性があると考え，類似していない他の因子と負の相関が見られた結果に着目した。

B-F2因子「不安他者尊重志向」とC-F1因子「好意希求的協調志向」，C-F5因子「内面重視志向」に負の相関が見られた。SNSの世界において親しい友だちに対しても不安を感じ尊重する，自らが好意を持たれることを望むこともなく，自らの思いや考えを積極的に表現しようとはしない非常に慎重なつきあい方をしている。特にC-F1因子とC-F5因子が混在する状況は，現実世界での他者尊重で気を遣っている状態からSNSの世界では心穏やかなつきあい方を求めているのかもしれない。

現実世界B-F3因子「自己表現重視志向」とSNSの世界C-F4因子「低自己肯定的迎合志向」において負の相関が見られた。現実世界の自己表現傾向は，SNSの世界では自己表現の増加と親しい友だちへの迎合傾向の減少を関連させ生徒の自己肯定感の状態を包括的に理解していくことが可能ではないかと考える。

その際，自己表現をする際に配慮や注意事項は現実世界とSNSの世界で異なる部分がある。生徒が，この違いを理解できているかも含め生徒を理解していくことが必要であろう。

B-F5因子「内面重視志向」とC-F2因子「好意希求的協調志向」において負の相関が見られた。生徒は，現実世界で親しい友だちにさえ十分な自己表現ができない時，SNSの世界において親しい友だちから親しい友だちから過度な称賛を求めていることが想定できる。

また，SNSを利用している生徒は，現実世界のB-F4因子「葛藤同調志向」における「友達と本音でぶつかり合っても平気である」や「友達に自分を理解してもらえないと自信がもてない」といったアンビバレントな質問項目あったことから協調しつつ親しい友だちとのつきあい方において自己表現に模索している可能性もあるのではなかろうか。

生徒の親しい友だちとのつきあい方は，現実世界とSNSの世界における類似した因子や因子内の質問に着目するだけではなく，相互に関連する異なる他因子にも着目し包括的に生徒理解に繋げていくことが重要である。

生徒が，現実世界とSNSの世界の同一の親

しい友だちのつきあい方には差異があるか理解していくことも重要な視点であると考える。生徒の現実世界とSNSの世界に共通する親しい友だちのつきあい方について比較検討していくことは今後の課題である。

4-3　中学生の現実世界とSNS世界における友だちのイメージを象徴する形容詞

SNS の利用の有無による現実世界の親しい友だちのイメージを象徴する形容詞の選択結果を検証したところ，親しい友だちのつきあい方同様にSNSの利用の有無により現実世界において違いが見られた。

このことから，中学生は，実際の学校生活においてSNSの利用の有無により異なる親しい友だちのイメージを抱き接している状態であることが明らかになった。

中学生の内面や内面の変化に基づく対人関係や集団形成への指導・支援を行う際，SNS の利用の有無によるイメージの相違も考慮していくことが重要であると考える。

しかし，形容詞の選択率と双対尺度法による対応関係に 12 語の違いが認められた。この 12 語は，双対尺度法の対応関係において現実世界とSNSの世界の中間に近い位置にあった。生徒は，現実世界とSNSの世界のどちらにも共通する親しい友だちのイメージを混在させている可能性も念頭に生徒理解を進める必要がある。

また，SNS を利用している中学生において，現実世界に比してSNSの世界では親しい友だちのイメージを象徴する形容詞の選択は少なかった。

この理由としてフェイスシートの回答では，SNS 利用歴は，男子生徒平均 1.9 年，女子生徒平均 3.2 年であり，概ね中学校に入学してから利用している生徒が多かったことが関係していると考える。

調査対象生徒にとってSNS上の経験が少なく，現実生活とSNSの世界における親しい友だちが同一の生徒であったり，現実世界とSNS の世界における親しい友だちを同一視していたりしていたことも考えられる。

本研究では，生徒理解の指標として SNS の世界における親しい友だちのイメージとして生徒が選択する形容詞から理解を深めていくことは難しかった。

今後，親しい友だちをイメージしやすい教示文の工夫も含め研究を継続していくことが本研究に残された課題である。

4-4　今後の展望

本研究の冒頭で引用したように総務省（2019）は 13 歳～19 歳のインターネット利用目的における約 8 割が「ソーシャルネットワーキングサービスの利用」「無料通話アプリやボイスチャットの利用」「動画投稿・共有サイト」を活用していることや 13 歳～18 歳の年齢層において年齢が上がるに従い，コミュニケーションツールとしてのSNS利用者が増加している可能性を示唆している。

内閣府（2019）は，中学生のインターネット利用状況は，年々増加し平成 30 年度には，95.1%であったことを示している（p.5）。同結果では，中学生のインターネットの利用状況として，動画視聴（80.9%），ゲーム（74.1%），コミュニケ―ション（68.2%）であると分析している（p.7）。

全国的なインターネットに関する調査のうちコミュニケーション（68.2%）というデータは，本研究において回答を得た中学生のコミュニケーションツールとしてのSNSの利用状況（63.9%）とほぼ一致する。

今後，携帯電話やスマートフォン等の所持時期が低年齢化するとそれに比してコミュニケーションを目的としたSNSの利用も低年齢化していくことが推測される。

インターネットを利用するスマートフォン，

携帯電話, パソコン, タブレット等の機器を所持する時期を鑑み，SNS 利用開始時期の全国的な傾向との同じ学校・学年段階による横断的比較や高等学校以降の SNS の世界における親しい友だちのつきあい方やイメージを象徴する形容詞について異なる学校段階による縦断的な検討も重要であろう。

親しい友だちの人数が増えるに従い（本研究では図 4 の 46 人以上），SNS の世界における友だちも増えている可能性を予想したが，本研究では明らかにならなかった。今後, 親しい友だちの人数における現実世界と SNS の世界との比較検討を行うことも必要である。

謝辞

本研究にあたり，忙しい中，時間を割いて質問紙調査に協力していただいた A 中学校，B 中学校の生徒の皆様，教員の皆様に心より御礼申し上げます。

参考文献

赤川果奈・下田芳幸・石津恵一郎（2016）『中学生の友人関係，自尊感情及び学校適応感の相互影響性』富山大学人間発達科学部紀要第 10 巻第 2 号，pp.1-10

安藤玲子・高比良美詠子・坂元章 (2 0 0 5) 『インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響』パーソナリティ研究，第 14 巻第 1 号，pp.69-79

東賢次(1997)『双対尺度法と地理データの解析』季刊地理学第 49 巻，pp.105-108

高坂康雅・池田幸恭・葉山大地・佐藤有耕(2010)　『中学生の友人関係における共有している対象と心理的機能との関連』青年心理学研究 22，pp.1-16

栗田克実(2019)『中学生の生活実態と自己肯定感に関する自己分析』旭川大学保健福祉学部研究紀要第 11 巻，pp.23-27

三浦麻子(2008)『ネットコミュニティでの自己表現と他者との交流』電子情報通信学会誌 91 巻 2 号，pp.137-141

文部科学省(2016)『日本の子供たちの自己肯定感が低い現状について』第 38 回教育再生実行会議参考資料 2, https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/chousakai/dai1/siryou4.pdf (2020 年 2 月 19 日)

文部科学省(2019)『平成 30 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について』p.83 https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf (2020 年 8 月 15 日)

内閣府（2019）『平成 30 年度青少年のインターネット利用環境実態調査結果（速報）』https://www8.cao.go.jp/youth/youthharm/chousa/h30/netjittai/pdf/sokuhou.pdf（2020 年 3 月 10 日）

西里静彦(1982)『質的データの数量化―双対尺度法とその応用』朝倉書店，pp.145-153

落合良行・佐藤有耕(1996)『青年期における友達とのつきあい方の発達的変化』教育心理学研究第 44 巻第 1 号，pp.55-65

作田誠一郎(2016)『「スクールカースト」における中学生の対人関係といじめ現象』佛教大学社会学研究 40，pp.43-54,

総務省（2019）『令和元年度情報通信白書進化するデジタル経済とその先にある Society5.0』https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/pdf/01honpen.pdf（2020 年 8 月 15 日）